



Title	ドイツ語の未来時制を教える（あるいは教えない）
Author(s)	黒谷, 茂宏
Citation	外国語教育のフロンティア. 2018, 1, p. 149-170
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69786
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドイツ語の未来時制を教える (あるいは教えない)

The Future Tense in German: How to Teach it

黒谷 茂宏

要約

ドイツ語の未来時制は、初級水準において導入する際には、注意の必要な文法アイテムである。初学者に若干の混乱を引き起こすおそれがあるからである。本論文では、未来時制の基本特性を概観した後、その4つの意味機能、即ち①「推量」、②「確定した未来」、③「意気込み」、④「要求」を、いつ、どのような順番で、どのようなやり方で導入してゆくのが適切であるか、その学習プランを紹介する。「未来形は推量形」、「未来のことは現在形で」、というドイツ語の基本姿勢を徹底しながら①「推量」を導入し、日常会話で重要な③「意気込み」へと向かう。この③「意気込み」は、教師や研究者の間でも誤解の多い用法であり、教える側にも注意が必要である。この辺りまでが初級で行いたいプロセスである。書き言葉、特に報道媒体での散発的な使用が認められる②「確定した未来」は、中級以降の実用的なドイツ語使用において、次第に存在感を増してゆく。事例に触れながら、①「推量」優勢の図式を壊さないように留意しつつ、「未来形は推量形」という基本姿勢を「未来形は基本的には推量形」へとアップデートしてゆく。④「要求」は小説や映画の台詞を理解するために知っておいた方がよい用法であるが、日常生活の中で外国語学習者が対応したり、また自ら話したりする機会は稀である。

キーワード : German language、tense、future

1. はじめに

ドイツ語の未来時制は、外国語としてのドイツ語学習の際には少なからぬ困難を生じる文法項目である。一方では、

- (1) ドイツ語の未来時制には、初学の段階で甚だ誤解を招きやすい要素があり、この誤解を回避するための配慮が必要である。

と言うのも、未来時制の誤解・誤用は、ドイツ語表現の広汎な領域にわたって大変な不都合を引き起こすからである。即ち、ドイツ語学習者は、初学の時点で既に、未来時制の最

低限の正しい用法を習得せねばならない。その際、未来時制を正しく使えるためには、単に未来時制のことを理解するのみならず、混乱しやすい他のアイテムとの差異をも正しく把握しておかねばならない。この点が、初級教育において未来時制を導入する際に特に留意せねばならないポイントである。なお、ここで「最低限の正しい用法」と言っているのは、教える際に、未来時制の意味論の全体像から、一部の捨象、及び単純化を行う、ということである ((25)「未来形は推量形」、3.1.2 節参照)。(1) で「配慮」と呼んだのは、この捨象と単純化のことである。

他方では、しかしながら、

- (2) 初学者のためのこの配慮が、初級を越えて中級から上級へ至る際には、むしろ仇と
なってしまう、

という点も考慮しておくべきだろう。問題 (2) は、旧来の大学システムで言えば教養課程、より今日的に言えば全学共通教育の第二外国語科目においては、ほとんど顕在化しない。学習水準がその段階へ至らないからである。従って、初級ドイツ語能力の獲得のために、(1) の「配慮」は妥当なものである。外国語学部ドイツ語専攻や文学部独文専攻で本格的にドイツ語を学ぶ学生を教える際には、より高い水準に到達した時点で、(1) に基づく原則的理解があくまで適切であることを強調しつつ、しかしながら更に詳細な把握を上乗せする形で、この時制の十全な用法が習得できるよう誘導していかねばならない。

本論文の目的は、このように重要であると同時に災いの元でもある未来時制を、初級から中級・上級へと至る学習過程の中で適切に習得させてゆくためのプランを提示することである。

論の主要な構成要素となるのは、以下の第2章と第3章である。まず次の第2章で、テーマであるドイツ語の未来時制の形 (2.1 節) とその意味機能 (2.2 節) の全体像を概観する。続いて第3章では、まずは3.1 節で初級ドイツ語学習のための学習プランを、そして3.2 節ではそれ以降の学習過程におけるアップデートを取り扱う。

2. 現代ドイツ語の未来時制：語形・意味機能の概観

まず、本論文のテーマである現代ドイツ語の未来時制について、語形 (2.1 節) と意味機能 (2.2 節) の両面から、全体像を把握しておきたい。主要な学術的文法書を参照するが¹⁾、基本的には斯界の最大公約数的見解の範囲での総括に留めておく。ただし、それらに対して、黒谷 (2015) で取り上げた話題への言及を含め、必要な個人的見解を加え、ドイツ語学習プログラムに合致した明確化という形での僅かな調整を行う。

特に、2.2 節に挙げる意味機能を、いつ、どのような順番で、どのようなやり方で学習

者に提示してゆくか、というのが本論文で提案する学習プログラムの核心である（3章参照）。

2.1 語形

ドイツ語の未来時制は分析的な活用形、即ち複合活用形であり、助動詞 *werden* と不定詞からなる。以下の (3) にその活用形の概要（不定詞と直説法未来）を挙げる。

(3) ドイツ語の未来時制の活用形（動詞 *sehen* 「見る」）²⁾：

未来不定詞：

sehen werden

	単数		複数
副文：			
1 人称	<i>dass ich</i>	~ <i>sehen werde</i>	<i>dass wir</i> ~ <i>sehen werden</i>
2 人称	<i>dass du</i>	~ <i>sehen wirst</i>	<i>dass ihr</i> ~ <i>sehen werdet</i>
3 人称	<i>dass er</i>	~ <i>sehen wird</i>	<i>dass sie</i> ~ <i>sehen werden</i>
主文：			
1 人称	<i>ich werde</i>	~ <i>sehen</i>	<i>wir werden</i> ~ <i>sehen</i>
2 人称	<i>du wirst</i>	~ <i>sehen</i>	<i>ihr werdet</i> ~ <i>sehen</i>
3 人称	<i>er wird</i>	~ <i>sehen</i>	<i>sie werden</i> ~ <i>sehen</i>

動詞 *werden* は本動詞としては「[~に] なる」を意味するが、「不定詞 + *werden*」という語結合は、この結合において不定詞として現れている動詞の複合活用形と解釈する以外の可能性はない。と言うのも、動詞 *werden* の補語に動詞の不定詞が来る、という構造は、本動詞 *werden* においてはあり得ないからである。従って、*werden* を本動詞と見なしたところで、そこから何らの意味を読み取ることもできない。複合活用形であるから、その意味は、例えば完了形の意味と同様に、構成要素の意味の和としては（即ち構成的には）導き出すことはできず³⁾、語結合全体に一つの活用形（統語範疇）の文意味論的解釈を与えるしかない。

かつて、この語結合における *werden* を Modalverb であると主張した研究者がいた⁴⁾。しかし *müssen* や *können* がそれ自体一つの動詞であって単独で語彙的意味を担い得るのに対し、この未来形においては *werden* と不定詞のいずれにおいても単独では意味を措定することができない。また、既に統語的な観点において、未来形の助動詞 *werden* の振る舞いは Modalverb とは異なる⁵⁾。「*werden* = Modalverb 説」は今日では既に棄却されていると見てよい⁶⁾。

2.2 意味機能

ドイツ語の未来時制の文意味論的効果を唯一の抽象的な意味機能に帰着させることが可能であるか否かは本論文の興味には属していない。たとえそれが可能であるかも知れない

にせよ、少なくとも実用的には、未来形の意味機能を幾通りかのパターンに分類することは可能であり、また少なくとも実用上は便利でもある (2.3 節と注釈 21 も参照)。

ここでは教育上の有益性という観点から、未来時制の意味機能を 4 種類に分類して提示する。まず主要・一般的な機能である①「推量」(2.2.1 節) と②「確定した未来」(2.2.2 節) の 2 つを挙げ、続いて、通例「人称に制約された機能」と見なされている③「意気込み」(2.2.3 節) と④「要求」(2.2.4 節) について述べる。

なお、各々の意味機能に与えられたレッテルは私の選んだものである。特に「意気込み」については 2.2.3 節で説明するが、黒谷 (2015) も参照されたい。

挙げられる事例は、その多くは私が直接見聞きした例、聞いたものを書き留めた例である。未来形を強調してあるが⁷⁾、全て私の手による。和訳も基本的に私が与えたものである。

2.2.1 ①「推量」

伝統的な立場では、あるいはドイツ語研究者の大多数においては (そして本論文もそうであるが)、(3) に挙げた活用形を「未来形」(直説法未来時制) と呼ぶ。即ち、この範疇 (Kategorie) が帰属する範疇グループ (Kategorisierung) は「時制」である。このことは、しかしながら、未来時制の意味論が時制的でなければならないということを必ずしも意味しない。実際、未来時制が最も多くの場合に発揮する意味機能は推量 (即ち、ある種の epistemische Modalität) である。「werden = Modalverb 説」が主張されたのも、このような意味的特性が主要な原因なのであろう。

(4) ①「推量」の未来形⁸⁾ :

a. *Hans wird morgen in Köln sein.*

ハンスは明日はケルンに在るだろう。【未来の出来事に関する推量】

b. *Hans wird jetzt in Köln sein.*

ハンスは今頃はケルンに在るだろう。【現在の出来事に関する推量】

(4)-a では、確かに未来の出来事が述べられているが、未来時制によって表されているのは、未来という時間ではなく、むしろ現実性の確定していない出来事に関する推量である。実際、(4)-b においては現在の出来事が述べられているが、未来形という活用形の文意味論的な貢献は (4)-a と (4)-b で全く変わっていない。このことは、(4)-a と (4)-b に対応する現在時制の文と対比すると一層明らかである。

(5) (4)-a と (4)-b に対応する現在時制の文 :

a. *Hans ist morgen in Köln.*

ハンスは明日はケルンにいる。

b. *Hans ist jetzt in Köln.*

ハンスは今ケルンにいる。

(5) においては、未来の出来事であれ ((5)-a) 現在の出来事であれ ((5)-b)、推量の要素が（当然ながら）消滅し、現実性が（少なくとも立言者にとって）確定した事柄について述べていると理解される。(4)-a と (5)-a の最小対、(4)-b と (5)-b の最小対の比較から、未来時制の文意味論的な貢献は推量にあることが明白に看取される。

なお、現在時制によって未来の出来事を表した文 (5)-a は、ドイツ語においては全く不自然ではないし、特殊でもない。単なる未来の出来事は、ドイツ語では現在時制で表される（基本姿勢 (29) 「未来のことは現在形で」）。

2.2.2 ②「確定した未来」

未来時制が日常的に最も頻繁に発揮する意味機能は①「推量」である。しかしながら、推量の意味が含まれないと考えられる用法も存在する。

例えば、公的な重要人物の予定を伝える場合に用いられる未来時制である。

(6) *Die Bundeskanzlerin wird am Samstag nach Kiew reisen.* (2014/08/19 SRF⁹⁾)

連邦首相は土曜日にキエフへ旅行する（ことになっている）。

連邦首相の動向などというものは細部まで決まっているはずであり、ここに推測の意味を見出すことは適切ではない。これは既に確定している未来の出来事を、やや荘重なニュアンスでもって伝えるために用いられる未来時制である。日常会話ではむしろ稀であり、書き言葉やニュースメディアなどでよく用いられる。未来時制のこの意味機能を②「確定した未来」の未来時制、と呼んでおく。

②「確定した未来」の未来時制は、天文学上の事象などにも使用される場合がある。

(7) [...] *wird am Mittag genau um 13.31 Uhr MESZ eine Triebwerksstufe einer Atlas-Trägerrakete [...] auf der Mondoberfläche einschlagen.* (2009/10/09 Wetter.com)

昼のちょうど13時31分（中欧標準時）に、打ち上げロケット「アトラス」のエンジンブースターが月面に命中する。

天球上の主要な天体の運行は、観測データと天体力学の計算によって細部まで特定されている。人工天体の軌道や運動速度も綿密に決められている。未来の出来事であっても推量

の余地は存在しない。①「推量」の未来時制の定訳は「だろう」であるが、(6) や (7) のような②「確定した未来」の未来時制に「だろう」を用いると不適切になることも多い。

「不定詞 + werden」の未来時制は、初期新高ドイツ語期には、主として神託や預言などの表現に用いられていた¹⁰⁾。これは超自然的な存在（神や天使、預言者など）が未来のことを既に知っているものとして、絶対確実に起こるものとして述べる際に用いられるものである。現代ドイツ語の②「確定した未来」の未来時制は、そのようなかつての用法の名残と考えられ、若干の古めかしさや堅苦しさを感ぜさせるものである。

2.2.3 ③1人称の「意気込み」

既に2.2節の冒頭で述べた通り、未来時制には、主語が特定の人称である場合に発現する意味機能があると考えられている。

一つは、主語が1人称の場合で、この主語（＝話し手）が自らの行動の実現を強い「意気込み」で確約する場合に用いられる。私はこの用法の未来時制を『『意気込み』の未来時制』、『意気込み』の1人称未来時制』と呼ぶ（黒谷2015）。

(8) *Ich **WERDE** das Beste tun!*

全力を尽くします！

助動詞 *werden* を大書しているのは、ここにアクセントが置かれることを示す。③「意気込み」の1人称未来時制においてはこのように助動詞 *werden* の強調が一つの特徴となっている。(8) ではこの特徴を明示するために助動詞の大書を行っているが、今後はこれを自明のものとして省略する。

未来時制のこの意味機能は、従来、強い「意志・意図・決意¹¹⁾」などと呼ばれてきた。しかしこのレッテルは極めて誤解を招きやすく、学習者にとって危険であるばかりか、教員や研究者ですらその意味や訳を取り違える原因となっている。特に「意志」は（あるいは対応のドイツ語「Wille」であればなおのこと）*wollen* を想起させてしまうが、③「意気込み」の未来時制は *wollen* とは全く異なる。この問題については黒谷 (2015) で取り扱ったが、ここで今一度注意を喚起しておきたい。

(9) *Wir müssen wissen,*

*Wir **werden** wissen.*¹²⁾

ドイツの数学者ダーヴィト＝ヒルベルトによる有名な発言 (9) について、数学者の野崎昭弘は次のように述べた。

- (10) ヒルベルトのロマンチックな標語「われわれは知らねばならない。われわれは知るであろう」は、ゲーデルの定理からそれが不可能とわかっているいまでも、私の好きな言葉である。特に「知る」というのが「何となくそう思う」とか「暗記する」ということでなく「理解する」ということであって、「納得するまで根拠を問う」知性にもとづいていることに、私は感動を覚える。これこそ現代科学の源を築いた古代ギリシャ人の特性であって、これがいまの日本にもしっかり根付いていたら、怪しげな新興宗教にだまされて他人を殺傷するような人はでなかったろう——などと思うのは私だけだろうか¹³⁾。

ある著名な日本のドイツ語学者は、野崎のこの部分を引用した後、次のように述べ、ヒルベルトの言葉の和訳が誤りであると指摘した。

- (11) 私も、その点は同感である。ちなみに、ヒルベルトの言葉のドイツ語版は、同書のP.093に載っている。Wir müssen wissen, wir werden wissen. ドイツ語の専門家としては、後半の文のwerdenは、一人称主語なので、「強い意志」の解釈がされるのが普通であり、その意味では、「われわれは知らねばならない。われわれは知りたい」となるはずだが、「知るであろう」という《予知》的訳語が日本(?)では好まれているのかもしれない。野崎昭弘氏が「ロマンチック」と評したのは、まさにこの部分が原因だと考えられるが、「知りたいのだ」という本来の意志的な意味からすると、実はロマンチックではなく、決意表明である¹⁴⁾。[強調はSK]

この「ドイツ語の専門家」は、「1人称主語の未来時制が『意志・意図・決意』を表す」という事実自体は知っていたのであろう。知らないはずがない。しかし選んだ訳語「知りたい」は、実際にこの③「意気込み」の未来時制が表す意味機能とは全く異なっている。我々はここに、「意志・意図・決意」というレッテルの典型的な悪影響を見ることができるのである。

③「意気込み」の1人称未来時制は、典型的には、選手宣誓を行う際の背後にある精神作用を抽出して表現するものである。このことは、上に挙げた(8)にはっきりと見て取ることができる。(8)は選手宣誓そのものだからである。ヒルベルトの「Wir werden wissen」は(そもそも③「意気込み」の未来時制と見なすのが適切であるならば)「我々は知ってみせる／知ってみせよう」のように訳すべきであろう。

他にも幾つか、以下に典型的な例を挙げる。

(12) *Ich werde bis zum bitteren Ende kämpfen.*

俺は最後の最後まで戦い抜くぞ。

(13) *Ich werde dich beschützen.*

君は僕が守るよ／守ってみせる。

(14) *Was technisch machbar ist, werden wir produzieren.* (Bausewein 1990:107)

技術的に製作可能なものでしたら、我々は作ってご覧に入れますよ。

(15) *Ich werde dich nie vergessen. Das werde ich nie.*¹⁵⁾

君のことは絶対に忘れない。忘れないよ絶対。

これらの中で、「したい」と訳するのが適切である例は、ただの一つも存在しない。そしてこのことは、③「意気込み」の未来時制の全体に当てはまることである。この用法の典型的な日本語訳の一つに「してみせる」を挙げることができるが、この「みせる」は、相手が視認できるようにする、という言い回しを通じて、出来事を実現するということを確約する作用を持っているのであろう¹⁶⁾。

③「意気込み」の1人称未来時制と *wollen* の意味機能が明白に異なることは、両者が共起する次の発話からも明瞭である。

(16) *Wir wollen gewinnen, wir können gewinnen und wir werden gewinnen — am 22. September!*

我々は勝ちたい。勝てるんです。そして我々は勝ってみせますよ — 9月22日に！

「*wir wollen gewinnen*」が「勝ちたい」という欲望、即ち心の内部の状態を表現しているのに対し、③「意気込み」の未来時制「*wir werden gewinnen*」は勝利を誓う宣言を行っている。

③「意気込み」の未来時制は現実における実現を確約する。

「勝ちたいけど無理」という発話には論理的な矛盾はないが、「勝ってみせるけど無理」は自家撞着した発話である。つまり *wollen* は、どれほど強くあり得ても、心の中のものであって現実からは独立している。それに対し、③「意気込み」の未来時制は現実コミットし、未来の自身の行動の実現を、撤回不可能な前提 (Präsupposition) として確定するのである。

なお、この意味機能は1人称主語で発現するものと言われているが、間接話法においてはその限りではないことに注意が必要である。

(17) a. *Er sagte, dass er **kommen wird/werde**.*

b. *Er sagte, er **werde kommen**.* (Bausewein 1990:145)

彼は「僕は来るよ」と言った。

(18) *Er hat uns versprochen, er **werde** das auf keinen Fall **tun**.*

彼はそんなことは絶対にしないと私たちに確約した。（『独和大辞典』、訳も）

また、主語が1人称であるからと言って、必ずしも③「意気込み」の意味機能が発現するとは限らない。

(19) *Ich glaube, ich **werde** mich wieder **verlaufen**.*

私、また迷子になっちゃいそうな気がするよ…。

これは①「推量」の用法である。

③「意気込み」の1人称未来時制は、話し言葉のみならず書き言葉でも用いられ¹⁷⁾、①「推量」に続いて重要な用法である。

2.2.4 ④2人称の「要求」

未来時制は、主語が2人称の場合にも、人称に特有の意味機能が発現するとされている。この場合、話し手がこの主語（＝聞き手）に対する「命令・要求¹⁸⁾」を表すことがある、あるいはできる、とされている。

(20) *Du **WIRST** mit uns **essen**.*

君は我々と一緒に食事をするんだ。

この用法でも、③「意気込み」の1人称未来時制と同様に、助動詞 *werden* に強勢が置かれる。(20) ではそのことを、やはり大書によって明示したが、今後は助動詞 *werden* の強勢は自明のものとして、特別な表記を用いない。

この意味機能を、私はここで「『要求』の2人称未来時制」、「『要求』の未来時制」と呼ぶことにする。更に少しばかり例を挙げておく。

(21) *Du **wirst** es uns **zeigen**, stimmt's?*

俺たちにちゃんと見せてくれるんだよな？

(22) *Du wirst deine Treue beweisen!*

誠意を行動で示しなさいっていうの！

④「要求」の2人称未来時制は出現頻度の低い意味機能である。一因として、2人称という制約から、ほぼ対面の会話でしか用いられない、という点が挙げられる。更に、この意味機能における「要求」は非常に高圧的であり、社会的立場における明白な上下関係（親子、上司と部下、看守と囚人、いじめっ子といじめられっ子など）に基づいている場合も多く、ほとんど強要や脅迫に近い、有無を言わせぬ強さを持っていることも、出現状況と頻度を限定する大きな要素となっているであろう。

なお、主語が2人称であるからといって、必ずしも④「要求」の意味機能が発現するとは限らない。

(23) *Keine Angst, du wirst die Prüfung schon bestehen!*

心配するな、お前はきっと試験に合格するとも。

(シュルツ／グリースバハ1983:77、訳も)

これは本論文の4機能においては①「推量」(の強調)と見るのが妥当であり、すぐ後で挙げる(24)-bに並行的な例である。

2.3 付言

以上で、ドイツ語の未来時制の概観を終えた。教室で取り扱う対象が一部分であるとしても、常に全体の図式を視野に入れておくことは重要である。

ドイツ語の未来時制においては、確かに出現頻度から考えれば、最も普通の用法は①「推量」である。しかしながらその一方で、この用法は、未来時制の意味のレパートリーの中ではむしろ異質である。と言うのも、それ以外の②「確定した未来」も、③「意気込み」も、そして④「要求」も、必ず未来の事象の記述を行う、という共通の性質を持つからである。この活用形を『未来』時制と呼ぶこと、あるいはそもそも「時制」の範疇グループに含めることは、従って、初学者にとっては躓きの石ではあるにせよ、この活用形の意味の全体像から考えれば(そして他の要素を考えても¹⁹⁾)、別にでたらめなことではない。

なお、シュルツ／グリースバハ(1983:76)には次の記述が見られる²⁰⁾。

(24) 文の中で助動詞 *werden* を強調すると、その叙述はことがらが未来において確実に期待されることを保証することになる。

a. *Ich werde dir das Geld geben.*

私は君にかならず金を与えるであろう。

b. *Robert wird seine Prüfung bestehen.*

ローベルトはきっと彼の試験に合格するであろう。

ここで (24)-a は③「意気込み」の1人称未来時制であると無理なく理解されるが（訳はともかく）、(24)-b は主語が3人称である。こちらは実用上は②「確定した未来」と理解しておいてもよいかも知れないが、①「推量」の強調と見るのが妥当であろう（(23) 参照）。この記述を含め、未来時制の様々な発現形態からは、本2.2節で挙げた未来時制の4分類、あるいはこの語形の意味機能そのものを、アクセント特性と絡めて、更に体系化できる可能性を見出すこともできるが、これ以上の詳細な記述は本論文の目的ではないので、深入りはしないこととする²¹⁾。

3. 未来時制の学習プラン

2章、特に2.2節で概観した4つの意味機能を、初級から中級・上級にかけて、いつ、どのような順番で、どのようなやり方で導入してゆくか、が問題であるが、特に重要なのは初級における未来時制の導入である。配慮 (1) のもとで、未来時制の最も重要な用法、即ち①「推量」を習得するのが第1の課題である。

しかし初学の段階で正しい方向性を得るために必要な、

(25)「未来形は推量形」

という基本姿勢は、実際には「強過ぎる概念規定」である。即ち、未来時制の意味機能は、実際には推量に留まらない。そこで中級以降のコースでは、(2) の問題を解決するため、(25)「未来形は推量形」という全体図の一部を他の用法で上書きしてゆく。ここではしかし、

(26)「未来形は基本的には推量形」

という全体像を崩さないようにすることにも留意せねばならない。

3.1 初級プログラム

3.1.1 未来時制を教える

そもそも初学者に未来時制を全く教えない、という選択は、コースの性質によっては、全くあり得ない話ではないかも知れない。しかし当該の初級ドイツ語コースを「実用的な外国語能力を習得するための基礎トレーニングコース」と位置づけるなら、定形100個中

2 個程度の割合には出現する未来の助動詞 *werden*²²⁾ の学習を放棄することはできない。結局はどこかで出会って説明する運命にあるからである。未来時制を注意深く除外した人工的な教科書を使うならともかく、オーセンティックなニュースメディアや書籍、映像媒体などを用いるなら、未来隠蔽作戦は直ちに破綻する。事実を見せながらユートピアを維持することはできない（ディストピアも然り）。

3.1.2 「未来形は推量形」

最初に何としても定着させねばならないのは、基本姿勢 (25) 「未来形は推量形」である。

3.1.2.1 「未来のことは現在形で」

基本姿勢 (25) 「未来形は推量形」は、裏を返せば、

(27) ドイツ語では、未来の出来事は現在形で表す

という基本姿勢を徹底させる、ということでもある。そもそもこの姿勢は、ドイツ語学習の最初期に一度は徹底されているはずのことである。最も基本的な現在時制の学習の後、

(28) 「進行形の不在」:

ドイツ語には英語のような（あるいは日本語のような）進行形は存在しない。「～する」も「～している」も、一般論も目の前で起こっていることも、全て現在形で表現する。

(29) 「未来のことは現在形で」 (= (27)):

ドイツ語では、(英語と異なり、) 未来の出来事も現在形で表現する。

という二大原則を示し、過ぎ去った出来事以外は全て現在時制で表現する、という認識を徹底させるのが常道である。二大原則 (28)・(29) は、学習を始めたばかりで言語の全体像がまだ全く見えていない初学者に希望を与える効果もある。現在時制だけを用いて、学習開始直後から幅広い表現が使用でき、しかもそれが初学時の学習便宜上の単純化でなく、あくまで自然な表現である、という点は、ドイツ語の魅力の一つであり、初学者にぜひとも楽しんでもらいたいところである。

ところが、未来形を学習した後、これまで何の問題もなく実現できていた基本姿勢 (29) をあっさり忘れてしまい、例えば「私たちは明日映画に行きます」に対して「*Wir werden morgen ins Kino gehen.*」などと作文する学習者が出てくる。選択の余地のないこれまでの

シンプルさ、そしてそれゆえに却って担保されていた自然さが、未来形を知ることによって壊れてしまう。この影響は、人によっては、非常に大きい。これが、未来形を学習した際に生じる、「甚だ誤解を招きやすい要素」(= (1)) である。

このような現象は、新しい知識によって、全体像が誤った形でアップデートされてしまう、というトラブルの一例であるが、ここで今一度、二大原則 (28)・(29) を強調し、未来形は、その名称にも拘らず、推量形なのである、ということを徹底する必要がある²³⁾。

基本姿勢 (25)「未来形は推量形」を端的に示すには、(4) と (5) の対照を用いるのが最も明瞭である。また、「未来形」という名称でありながら「未来」という時間の概念と特に結び付いた語形ではない、ということを印象づけるには、(4) と (5) に加えて未来完了形を例として示すという方法もある。

(30) *Hans wird schon längst Köln verlassen haben.* (未来完了形)

ハンスはもうとくにケルンを去ってしまっただろう。【過去の出来事に関する推量】

未来完了形は実用上は初級で教える必要のない文法アイテムである。ここでは単に、未来完了形が過去の出来事の推量のために用いられることを例示し、それによって「未来形」が「未来という時間」でなく、「推量」と強い関連を持つアイテムであることを強調するための道具として利用すれば充分である。

なお、(30) のように未来完了形を持ち出すことは、実際には単に未来時制の学習のみを考慮した措置ではない。と言うのも、未来完了形は *Modalverb* の学習における重要ポイントへもつながってゆくからである。つまりそちらの側でも、直接の重要性とはまた別に、言わば“ロイター板”として有用なのである。しかしながら *Modalverb* の学習については、本論文の論述範囲外の話題であるため、これ以上の深入りはしないこととする (3.1.2.3 節も参照)。

3.1.2.2 *wollen*を咎める

基本姿勢 (29)「未来のことは現在形で」を浸透させるためにもう一つ（状況に応じて）必要になってくるのは、未来の出来事に *wollen* を使おうとする学習者を厳しく咎めることである。

この間違いは、当然ながら、英語からの悪影響に起因するものである。*Modalverb* の学習の際に、ドイツ語の *wollen* が英語の *want* の意味を持つことを強調しておかねばならないが、それでもある程度は、この間違いは出てくる。そしてこれは、純粋に学習量の不足、即ちドイツ語との単純接触時間の不足と相関があるものと推測される。

実際、外国語学部ドイツ語専攻においては、この間違いはまず現れない。このような誤

りを犯すとしたら、学習量が明白に、しかも大規模に不足しており、下手をすると全学の教養科目の第二外国語学習者にも劣るような、極めて成績の悪い学習者のみであろう。

③「意気込み」の1人称未来時制の際にも、遺憾ながら *wollen* との悪しき相互作用が見受けられるが (2.2.3 節参照)、未来時制の学習において、*wollen* は特に注意が必要なアイテムであると言わねばならない。

3.1.2.3 Modalverbと関連づける

基本姿勢 (25)「未来形は推量形」を浸透させるためには、「未来という時」との関連を絶つ、という否定的な方向の誘導と同時に、未来形を、同様に *epistemische Modalität* を表現する手段である Modalverb の仲間として印象づける、という方向性も重要である。

(31) a. *Peter geht zurück nach Deutschland.*

ペーターはドイツへ帰ってしまう。

b. *Peter muss zurück nach Deutschland gehen.*

ペーターはドイツへ帰ってしまうに違いない。

c. *Peter kann/mag zurück nach Deutschland gehen.*

ペーターはドイツへ帰ってしまうかも知れない。

d. *Peter kann nicht zurück nach Deutschland gehen.*

ペーターがドイツへ帰ってしまうはずがない。

e. *Peter soll zurück nach Deutschland gehen.*

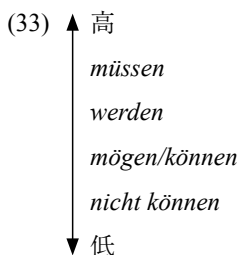
ペーターはドイツへ帰ってしまうそうだ。

といった *epistemische Modalität* を表現するための一連のレパートリーの中へ、

(32) *Peter wird zurück nach Deutschland gehen.*

ペーターはドイツへ帰ってしまうだろう。

という未来時制の文も混ぜてしまう。*epistemische Modalität* は「現実であることが判明していない出来事に対する現実度の評価」という説明で導入するが、現実度の高低を、以下の (33) のような物差し：



として提示するのが効果的である²⁴⁾。このようにして、未来形（の助動詞）の*werden*を、「現実度の評価」のグループのメンバーとして提示することで、①「推量」の未来時制の意味を定着させてゆく。

この方法を効果的に行うためには、Modalverbの学習の際に仕込みがあることが望ましい。つまり、6つの各Modalverbの意味を散発的に、相互関連なしに提示するのではなく、全体をまずは「可能」・「許可」・「義務」などの「根本義グループ」と、「現実度評価グループ」に二大別し、後者において、全体で「現実度の評価」の目盛りの違いを表現し分ける働きになっていることを印象づけておく。即ち、(33)の物差しから*werden*を除いたものを、Modalverbの学習の時点で既に登場させておく。これによって、未来時制の意味の学習はスムーズに進む。未来時制の学習は、従って、Modalverbの直後が適当である。

また、学習が進んだら、(33)の物差しには*müsste*、*dürfte*、*könnte*といった接続法Ⅱ式の形も加え、現実度評価のレパートリーを拡充することができる。あるいは、*vielleicht*や*wahrscheinlich*のような現実度評価の副詞（法副詞）と関連づけることも有益であるが、これらのタスクは初級コースを終えた後で行っても遅くはない。

なお、Modalverbのepistemischな用法においては、上記(32)・(33)に挙げたものは初級水準での学習が必須であるが、*wollen*のepistemischな用法は、初級水準では全く登場する必要がない。従ってここにおいては、未来時制の天敵である*wollen*（2.2.3節、3.1.2.2節参照）と対面せずに済むわけである。

既に2.1節で述べたように、未来の助動詞*werden*をModalverbと解釈する見解は成り立ち得ない。しかしながら、表現ツールとしては、未来時制はModalverb（のepistemischな用法）の仲間として取り扱うのが、実用的な外国語学習の方法である²⁵⁾。

3.1.3 ③1人称の「意気込み」

初級水準においては、①「推量」の未来時制が安全に習得できれば、まずは成功である。しかしながら、会話での頻度を考えた場合、初級において既に③「意気込み」の1人称未来時制を導入できるなら、その方がよい。その際、基本姿勢(29)「未来のことは現在形で」との関連で、適切でない未来時制の使い方をすると、滑稽な効果を生んでしまうおそれが

ある、という例として活用することもできる。あるいは、③「意気込み」の1人称未来時制が必ず未来の出来事を指すことから(2.3節参照)、「『未来』時制」という名称を納得してもらうための一助として利用することもできる。「名は体を表す」という先入観は大きな力を持っているが、そこを逆手にとって、むしろ納得への道を敷く。名称に納得がゆけば、①「推量」の方も確信を持って使用できるようになる。そのような学習者は、確かにいる。

ただし、主語が1人称だからと言って必ずしも③「意気込み」の意味になるとは限らない、ということは、一応念押ししておく必要があるだろう(19参照)。

付け加えるなら、③「意気込み」の未来時制に対応する典型的な日本語表現として、「～してみせる」という言い回し(2.2.3節参照)、あるいは以下の(34)のように「～してやる」という言い回しなどが考えられるが、

(34) *Wir werden sie schlagen. Wir werden sie ausbuhnen. Nieder mit Japan!*

我々は日本を倒してやる。ブーイングを浴びせかけてやる。くたばれ日本！

ただ、それらの言い回しが使えるのは肯定文の場合であり、否定文においては日本語には適切な対応物が存在しない²⁶⁾。従って、

(35) *Ich werde das nicht hinnehmen!*

俺はこんなの受け入れないぞ！

(36) *Ich werde nicht aufgeben!*

私は諦めないよ！

といった表現の場合、ドイツ語を理解する分には、③「意気込み」の未来時制であると判断することはそれほど難しくないが、自らがドイツ語で表現する場合、日本語表現を頼りにしてドイツ語の③「意気込み」の未来時制を選択する、というプロセスは役に立たず、自身の気持ちの中に意気込み・宣誓・宣言といった要素があるか否かを、表現を選択する際の決定的な鍵とせねばならない。

実際のところ、③「意気込み」の未来時制は、自ら発話するのが適切であるような状況に出くわす可能性の高い用法であり、発信面での正確な状況判断を磨くことは重要である。しかしながら、それは初級から更に先の段階へと進んだ学習者の課題となるであろう。

3.2 中級以降の学習プログラム

基本姿勢 (25)「未来形は推量形」のもとに①「推量」の未来時制を習得しつつ、なおかつ基本姿勢 (29)「未来のことは現在形で」をしっかりと維持できれば、初級水準において未来時制を獲得するという最低限のハードルは越えられたことになる。これに③「意気込み」の未来時制が加われば、会話においてはこれ以上を望む必要は当面はないであろう。

一方、書き言葉を読む、という方向を進んでゆくと、いずれ②「確定した未来」の未来時制に対面することになる。

3.2.1 ②「確定した未来」の未来時制

②「確定した未来」の未来時制は、ドイツ語学習者にとっては、読んで理解できれば充分であり、自ら話す機会はまず訪れない（ニュース記事の朗読のような場合を除く）。また、自らが書く機会もないと考えてよい。②「確定した未来」は特に報道媒体で出現頻度が高まるが、報道というこの言語媒体は、中級以降の実用的な外国語使用（「学習」でなく）における主要領域の一つであるため、初級修了後のドイツ語学習の中でこれを学習者に認知してもらうことは重要である。

ところが、この②「確定した未来」の用法は日本人にとっては馴染みの薄い意味タイプである。そのことも相俟ってか、②「確定した未来」の未来時制を、出会った際にそれであると認識することが困難である、即ち気づかない、という傾向が見受けられる。

ここには、②「確定した未来」が①「推量」との弁別においてやや分かり辛いという要因も絡んでいるのであろう。しかしながら他方では、基本姿勢 (25)「未来形は推量形」への過剰適応と言えるのかも知れない。そしてこれが、基本姿勢 (25) を徹底することによる単純過多、即ち弊害である（＝(2)）。

ここでは、学習者における基本姿勢 (25)「未来形は推量形」・(29)「未来のことは現在形で」の定着度に問題がないことを確認しつつ、基本姿勢 (25)「未来形は推量形」は原則的には正しいのだが、②「確定した未来」のような用法もある、ということを認知させてゆかねばならない。即ち、この用法が実際に登場したときには、教員側から逐一指摘し、まずは単純接触を増やしながら定着を図る。最終的には、基本姿勢 (25) を、修正された基本姿勢 (26)「未来形は**基本的には**推量形」へと移行させてゆく。

この点に関して付け加えるならば、②「確定した未来」を導入する場合、既に③1人称の「意気込み」が導入されている方が好都合であるように思われる。③「意気込み」は、(25)「未来形は推量形」が絶対でないことを示す好例となり、②「確定した未来」を受容する助けとなってくれるだろう。実際のところ、③1人称の「意気込み」は、人称が限定され、また文アクセント上も異質である、という目立った特殊性を持ち、それ故に基本姿勢 (25)「未来形は推量形」に悪影響を与えにくい、ということが経験的に指摘され得る。つまり、

基本姿勢 (25)→(26)「未来形は**基本的には**推量形」の移行プロセスにとっては好都合な出発点であると言える。

3.2.2 ④2人称の「要求」について

④2人称の「要求」の未来時制は、2.2.4節で述べたように、話し言葉の、しかも限られた状況でしか発生しない。日常会話で外国語学習者が自らに向けた発話としてこれを聞く機会は少ない。外国語学習者が自ら発話することが適切であるような機会はそれ以上に稀であり、ほばないと言って差し支えない。もちろん、自らが書く機会もない。

外国語学習者がこの用法に出くわすのは、大抵は小説や映画・テレビドラマの台詞として登場した場合である。もし教室でそのような実例が出てきたら、これを指摘し、基本姿勢 (25)「未来形は推量形」が当てはまらない用法であることを紹介する。学習者の多くは、既に基本姿勢 (26)「未来形は**基本的には**推量形」・基本姿勢 (29)「未来のことは現在形で」を問題なく身につけているであろうから、あとは④2人称の「要求」に出くわしたときに、この用法であると気づくことができれば充分である。もっとも、台詞の意図を取り違えると、全体の理解に差し障るので、この用法が存在することを知っておくことは、それなりに重要である。しかし、このような「道すがら」の形以外で、殊更に④「要求」を学習テーマとして取り上げる必要性は乏しい。

4. おわりに

未来時制は、ドイツ語表現、あるいはドイツ語学習の中心的なテーマとなるような存在ではない、バイプレイヤーの一種である。しかし的確な場面で使いこなせれば、大きな表現力を持つ。これは特に③1人称の「意気込み」の未来時制に当てはまる。①「推量」は、話し言葉においても書き言葉においても、「現実度の評価」(epistemische Modalität)において、*müssen*ほど強すぎず、*können/mögen*ほど弱すぎないという点で便利な表現アイテムである。多くのドイツ語学習者が、未来時制を適切に理解し、あるいは使用し、自らの受信・発信能力を高めることを期待したい。

注釈

- 1) ここではBresson (2001)、DUDEN (1973³)、DUDEN (1995⁵)、DUDEN (2009⁸)、Engel (1988)、Engel (2004)、Flämig (1991)、GRUNDZÜGE (1981)、Helbig/Buscha (1999¹⁹)、IdS (1997)、シュルツ／グリースバハ (1983)、ヘルビヒ／ブッシャ (2006) 等。
- 2) 複合活用形である、即ち一つの動詞の活用形でありながら複数の語形から成り立っている、という事情から、不定詞句・副文・主文での典型的な位置特性も含めて図式的に示す。副文では便宜的に従属接続詞 *dass* を先頭に置く。記号「~」は、枠構造の内側の領域（中域）であり、そこに他の文成分が生じ得ることを示す。なお、未来不定詞は実際には使用されないが、未来形の不定

の代表形・理念形として、便宜のために挙げておく。

- 3) IdS (1997:1689) : 「Die Bedeutung läßt sich nicht (zumindest nicht in einfacher Weise) kompositional gewinnen aus der Bedeutung des Hilfsverbs *werden* im Präsens und der Bedeutung des Infinitivs」。
- 4) 例えば Vater (1975)、Engel (1988)。なお、諸家による Modalverb 及び Modalitätsverb の認定については、Johnen (2006:285f.) の包括的な一覧表が便利である。
- 5) IdS (1997:1689) : 「Eine Behauptung von *werden* als Modalverb, wie sie Vater 1975 vorschlägt, ist schon rein syntaktisch inadäquat」。
- 6) Engel は Engel (1988:463) において *werden* を Modalverb の一つとして明示的に挙げているが、Engel (2004:244) においてはこの見解を取り下げている。もっとも、その際 *werden* には「Nebenverb」なる素性の判然としない名称が与えられ (Engel 2004:246)、また未来時制という統語範疇の存在も少なくとも積極的に認めていないようである。
- 7) (31) では Modalverb を強調しているが、これはオーセンティックな例ではない。(3) と (5) も同様。
- 8) ①「推量」の未来時制の意味を把握するために挙げられる典型的な例 ((5) との対照も含めて)。また、(30) も一連の典型例の一つである。
- 9) Schweizer Radio und Fernsehen。
- 10) Szczepaniak (2011²:146) : 「Interessanterweise ist das futurische *werden* im Frühneuhochdeutschen hauptsächlich in Prophezeiungen, Weissagungen oder anderen Ankündigungen des Autors belegt (Smirnova 2006)」。
- 11) 対応するドイツ語は「Wille」、「Absicht」、「Entschluss」等。Cf. DUDEN (1995⁵:147)、GRUNDZÜGE (1981:515)、Helbig/Buscha (1999¹⁹:156)。
- 12) Hilbert (1935:387)。なお、2行目の行頭大書は転記ミスではない。
- 13) 野崎 (1996:208/2006:270f.)。引用元 ((11) の筆者) に倣い、改行を省略している。
- 14) 黒谷 (2015:18) でも述べた通り、引用元については、敢えてこれを伏せることとする。個人を非難することが目的ではないからである。
- 15) 第2の文の冒頭（前域）にある指示代名詞 *das* の先行詞は、前の文で未来時制の構成要素となっている不定詞 *vergessen*（あるいは不定詞句 *dich vergessen*）である。つまり第2文も未来時制である。このように、複合活用形の、助動詞でない方の構成要素は（場合によっては、主要な他の文成分と合わせて）代名詞化することができる。このことは完了形の過去分詞にも当てはまる（例：“*Haben wir gewonnen?*” — “*Das haben wir!*”）。注釈25も参照。
- 16) 「出来事の実現」と「視認」の間には、認知的に深い関わりがあると考えられる。例えば、ドイツ語の動詞 *sich ereignen* 「[[出来事が] 起こる」の語源は *Auge* 「眼」である。なお、*eigen* 「固有の」とは何の関係もない。石川 (1993:71ff.) がこの話題でエッセイを書いている。
- 17) 間接話法である (17)・(18) はその実例とも見なされ得るが、間接話法でない真正の実例は黒谷 (2015:24) 参照。
- 18) 対応するドイツ語は「Befehl」、「Aufforderung」等。Cf. Flämig (1991:395)、GRUNDZÜGE (1981:515)、Helbig/Buscha (1999¹⁹:156)。
- 19) IdS (1997:1689, 1699)。
- 20) 和訳も訳書から取った。便宜上、例文にナンバリング (a,b) を付し、レイアウトを変更している。
- 21) (23) と (24)-b には、③「意気込み」の1人称未来時制への連続性が看取される。特に、(23) に現

れている心態詞 *schon* の機能などとも考え合わせ (黒谷 2015:23 参照)、未来時制の意味機能の全体像に関して、異なる図式を提案することも可能である。しかしながら本論文の趣旨に鑑み、本 2.2 節の簡明な 4 分類の枠内での議論に留まりたい。

- 22) Szczepaniak (2011²:148)。未来時制 1.5% と未来完了時制 0.3% を合わせ、未来の助動詞 *werden* の出現頻度は 2% 弱と見積もられる。
- 23) この点では、『独和大辞典』の *werden* (助動詞) の項目で、冒頭にいきなり「*Wir werden morgen abreisen*. 私たちは明日旅立ちます」などという例文が載っているのは、大変迷惑なことである。例えばホテルのフロントに翌日の出発を伝えるなら現在時制の「*Wir reisen morgen ab*.」の方がよほど適切である。
- 24) ただし、*sollen* は現実度の「高低」についての意味を持たないため、この物差しの中には位置づけられない。
- 25) なお、未来時制は複合活用形であり、「不定詞 + *werden*」という組み合わせ、即ち助動詞 *werden* と動詞の不定詞の両方を必要とする。そのため、例えば、Modalverb で可能な「*Ich muss nach Hause*.」のように不定詞が完全に欠如した使用は不可能である。注釈 15 も参照。
- 26) 「～してやらない／あげない」は場合によっては可能かも知れない。なお、否定文の実例としては、(35)・(36) 以外に (15)・(18) も参照。

参考文献

集団による著作などに対して、便宜のために略称を用いたものがある。欧文献においてはこれを特にスモールキャピタルで示す。

Bausewein, Karin

- 1990 *Akkusativobjekt, Akkusativobjektsätze und Objektprädikate im Deutschen. Untersuchungen zu ihrer Syntax und Semantik (= Linguistische Arbeiten 251)*, Max Niemeyer, Tübingen.

Bresson, Daniel

- 2001 *Grammaire d'usage de l'allemand contemporain (= Hachette Supérieur)*. Hachette, Paris.

DUDEN

- 1973³ Grebe, Paul (rev.): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (= Der Duden in 10 Bänden 4)*, Bibliographisches Institut / Dudenverlag, Mannheim [et al.].

DUDEN

- 1995⁵ Drosdowski, Günther (ed. & rev.): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (= Der Duden in 12 Bänden 4)*, Bibliographisches Institut & F.A. Brockhaus / Dudenverlag, Mannheim [et al.].

DUDEN

- 2009⁸ *Die Grammatik (= Der Duden in 12 Bänden 4)*, Dudenverlag, Berlin.

Engel, Ulrich

- 1988 *Deutsche Grammatik*, Julius Groos, Heidelberg.

Engel, Ulrich

- 2004 *Deutsche Grammatik. Neubearbeitung*, Iudicium, München.

Flämig, Walter

- 1991 *Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur und Wirkungszusammenhänge*, Akademie Verlag, Berlin.

GRUNDZÜGE

- 1981 Heidolph, Karl Erich / Flämig, Walther / Motsch, Wolfgang [et al.]: *Grundzüge einer deutschen Grammatik*, Akademie-Verlag, Berlin.

Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim

- 1999¹⁹ *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für Ausländerunterricht*, Langenscheidt / Verlag Enzyklopädie, Leipzig [et al.].

Hilbert, David

- 1935 “Naturerkennen und Logik. Naturwissenschaften 1930”, *ibid.*: *Gesammelte Abhandlungen 3*, Julius Springer, Berlin, 378-387.

IdS

- 1997 Zifonun, Gisela / Hoffmann, Ludger / Strecker, Bruno [et al.]: *Grammatik der deutschen Sprache*, 3 Bände (= *Schriften des Instituts für deutsche Sprache 7.1-7.3*), Walter de Gruyter, Berlin; New York.

Johnen, Thomas

- 2006 “Zur Herausbildung der Kategorie *Modalverb* in der Grammatikographie des Deutschen (und des Portugiesischen)”, *Pandaemonium germanicum 10*, 283-338.

Smirnova, Elena

- 2006 *Die Entwicklung der Konstruktion würde + Infinitiv im Deutschen. Eine funktional-semanticische Analyse unter besonderer Berücksichtigung sprachhistorischer Aspekte* (= *Studia Linguistica Germanica 82*), Walther de Gruyter, Berlin.

Szczepaniak, Renata

- 2009¹/2011² *Grammatikalisierung im Deutschen. Eine Einführung* (= *Narr Studienbücher*), Narr Francke Attempto, Tübingen.

Vater, Heinz

- 1975 “Werden als Modalverb”, Calbert, Joseph P. / Vater, Heinz (eds.): *Aspekte der Modalität*, Gunter Narr, Tübingen, 71-148.

石川 光庸

- 1993 『匙はウサギの耳なりき：ドイツ語源学への招待』 白水社、東京。

国松 孝二 (ed.)

- 1985¹/2000² 『独和大辞典』 小学館、東京。

黒谷 茂宏

- 2015 「ドイツ語における1人称主語の未来時制」、『言語社会共同研究プロジェクト 2014：ドイツ語をめぐる言語社会研究2』、大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻、13-26。

シュルツ／グリースバハ

- 1983 稲木 勝彦（他）訳：『ドイツ文法』 三修社、東京。

野崎 昭弘

2006 『不完全性定理：数学的体系のあゆみ（＝ちくま学芸文庫）』筑摩書房、東京【『同
(1996):『不完全性定理:数学的体系のあゆみ（＝たのしいすうがく2）』日本評論社、
東京』の改訂版】

ヘルビヒ／ブッシャ

2001/2006 在間 進訳：『現代ドイツ文法【新装版】』三修社、東京。